

17世紀末：我孫子村絵図にみる依網池の 水利特性について

川内 眷三

四天王寺国際仏教大学紀要

第40号

2005年9月

(抜刷)

17世紀末：我孫子村絵図にみる依網池の水利特性について

川 内 眷 三

(平成17年 3月31日 提出)

記紀記載における池溝開削に関する初見が依網池である。筆者は今までに、宝永元(1704)年の大和川付け替えによって分断され、池床のほとんどが順次潰廃されていった依網池の復原研究をおこなってきた。今回、新たに17世紀末の作成とみられる「我孫子村絵図」の所在が確認され、これに大和川付け替え以前の依網池と我孫子村全域の水利網が描かれていることから、この分析をすすめ新たに知見した依網池の水利特性を探る。

「我孫子村絵図」の描かれた様子から依網池は池中に池があり、そして井路がある特異な溜池であった。それは我孫子村が依網池用水を利水する過程のなかで形づくられてきたものであり、我孫子村の水利空間のみにとどまらず、16・17・18世紀の依網池周辺の水利事情が蘇る。池中の永年の土砂堆積を原因として大和川付け替え以前の依網池の灌漑機能はかなり低下し、特に村域が地高である我孫子村では用水の不足が著しく進行していた。しかし、池面積が広大で後背としての依網池の役割は大きく、慶長期での狭山池大改修事業にともない集水を目的にした小池を池中に開削して、新たな水利システムを構築した様子がとらえられる。さらに池中に描かれた井路の様子から集水の重要性とともに、17世紀初期の狭山池水地域水利再編の一端を推考することができる。明らかにした近世初期の依網池の水利特性、及び前稿での復原研究をもとに、河内平野南部での古代に遡る歴史をもつ池溝開削との比較、大仙陵池など古墳周濠との立地形態、記紀記載の難波大道との生産・流通など、さまざまな側面からのアプローチが考えられ、古代依網池の開削を検証する今後の課題に迫る。

キーワード：我孫子村絵図、依網池の復原、水利特性、集水機能、慶長期狭山池大改修事業

1. はじめに (依網池の復原研究をふまえて)

筆者は「依羅池古図」(大阪市住吉区庭井：大依羅神社所蔵(桜谷吉史氏)、写真1、トレース図は前稿(注1)に掲載)、「依網池往古之図」(大阪市住吉区荻田：寺田家所蔵、写真2、トレース図は前稿に掲載)をはじめ、旧依羅村(現大阪市住吉区)に現存する各種絵図を分析するなかで、宝永元(1704)年の大和川付け替えによって分断され、池床のほとんどが順次潰廃されていった依網池の復原研究をおこなってきた¹⁾。

これによって、①依網池の位置と形態が確定され(第3図)、②その位置する土地条件から依網

池の規模と水深、③依網池の集水と狭山池用水との関係、④依網池の水懸り範囲と灌漑特質、⑤復原した現況比定から依網池を類推する景観を検証し、近世初期の姿態を具象化することができた。

記紀における池溝開削に関する初見が依網池であり、崇神期から推古期にかけて依網池関連の記事をたびたびみることができる²⁾。近世初期での依網池を復原することによって、その時期での水利事情の分析のみにとどまらず、日本の古代史上、重要な位置づけがなされる上町台地南辺から河内平野南部の段丘面に及んだ、古代土地開削の解明

につながる。

前稿での依網池の復原研究において、その規模は満水面積：約42万8千 m^2 、堤体面積：約2万5千 m^2 で、池敷面積は昭和大改修以前の狭山池と同規模程度の大池であった³⁾。しかし、立地する地形型の状況から推察して（第3図、第4図）、水深は平均1～2m程度と極めて浅く、貯水量は50万 m^3 以下であったとみなされる⁴⁾。近世初期の依網池は、親池としての機能をもつ狭山池のうつし池のひとつであるが、上町台地南辺の我孫子台地に位置する荻田村（第3図ウ）、庭井村（第3図エ）、前堀村（第3図オ）、我孫子村（第3図ア）、杉本村（第3図イ）の5ヶ村に及んで、約100町歩～120町歩程度の灌漑域をもっていたものと推定される⁵⁾。

今回、新たに17世紀末の作成とみなされる「我孫子村絵図」⁶⁾（森村氏所蔵、写真3、第1図：トレース図）の所在が確認され、これに大和川付け替え以前の依網池と我孫子村全域の水利網が描かれている。筆者が前稿で引用した「依羅池古図」、「依網池往古之図」で分析できなかったことが「我孫子村絵図」に描写され、依網池の新たな水利システムを知見することができる。

こういったことに鑑み、本稿では「我孫子村絵図」に描写・記載された事項を抽出して、①同絵図の作成背景を明らかにするなかで、②依網池での我孫子村のおかれた水利事情の背景、③我孫子村を中心に荻田、庭井村に及んだ水利調整の態様、④狭山池用水の依網池への導水事情と慶長期に実施された狭山池大改修事業の背景、⑤極めて浅い依網池床の埋積の経緯、を中心に分析する。

前稿での依網池の復原と集水・灌漑事情を中心とする研究の一部を補正するなかで、「我孫子村絵図」よりとらえられる水利空間の変貌経緯と、明らかにされた依網池の水利特性を把握するものである。近世初期での依網池の新たな水利事情を

説明することにより、古代に遡る依網池研究の展開に弾みをつけたい。

2. 「我孫子村絵図」の作成背景

(1) 作成年代と背景

「我孫子村絵図」（縦・南北1m35cm×横・東西1m）は数葉に剥離して南西の部分が遺失し、ところどころ虫食い状に剥落している（写真3）。しかし、遺失した部分は依網池の南西端の箇所であり、我孫子村域の描写については、前稿で引用した18世紀初期の作図とみられる我孫子村絵図（以下、「後：我孫子村絵図」⁷⁾と呼称、寺田家所蔵、第2図：トレース図）の構成と酷似している。したがって剥落している文字・数値については、「後：我孫子村絵図」の記載内容と、「我孫子村絵図」記載の文章内容の前後を類推しておよそ全容を把握することができる（第1図）。

「我孫子村絵図」は、依網池の全域と村全域を描き、同池から三本の通水井路より四方に分水した導水井路が描かれる。村域の田畑は黄土系色、居村は薄桃色、井路・溜池は水色、道路は朱色、堤上は道路になっているため朱色に黒色を重ねて彩色されている。導水井路に20ヶ所の分堰樋がみられ、それぞれ樋長の丈尺が記される。

我孫子村の屋敷数は不鮮明ではあるが99軒と把握でき、居村域は竹藪と井路で囲繞されており、環濠集落の形態を保っている⁸⁾。居村内に中ノ坊とあるが、これは僧空海が再興した中の坊の寺伝がある大聖観音寺（我孫子観音）にあたる⁹⁾。また、両道場の記載が二ヶ所にわたってみられるが、今の浄土真宗本願寺派円満寺、真宗大谷派引接寺を指すのであろう。

居村内の東に、御除地として氏神牛頭天王が鎮座する。これは明治40（1907）年に大依羅神社に合祀された旧我孫子神社のことで、中世我孫子城址のあったところとされ、その後大聖観音寺の境

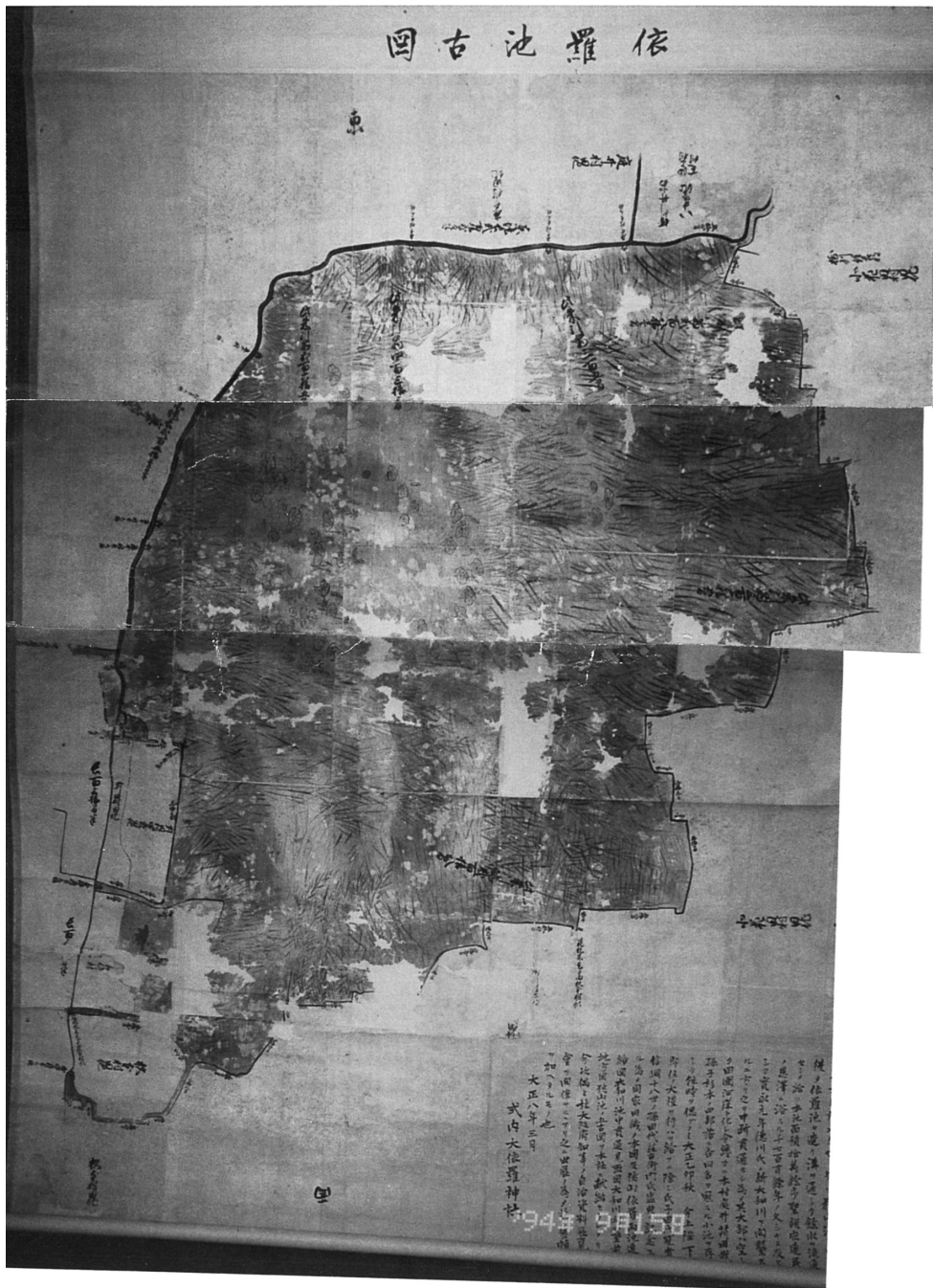


写真1 依羅池古図

大依羅神社所蔵絵図〔添書に伝文明年間とあるが、慶長期以降（1600～1690年間）の作成〕。

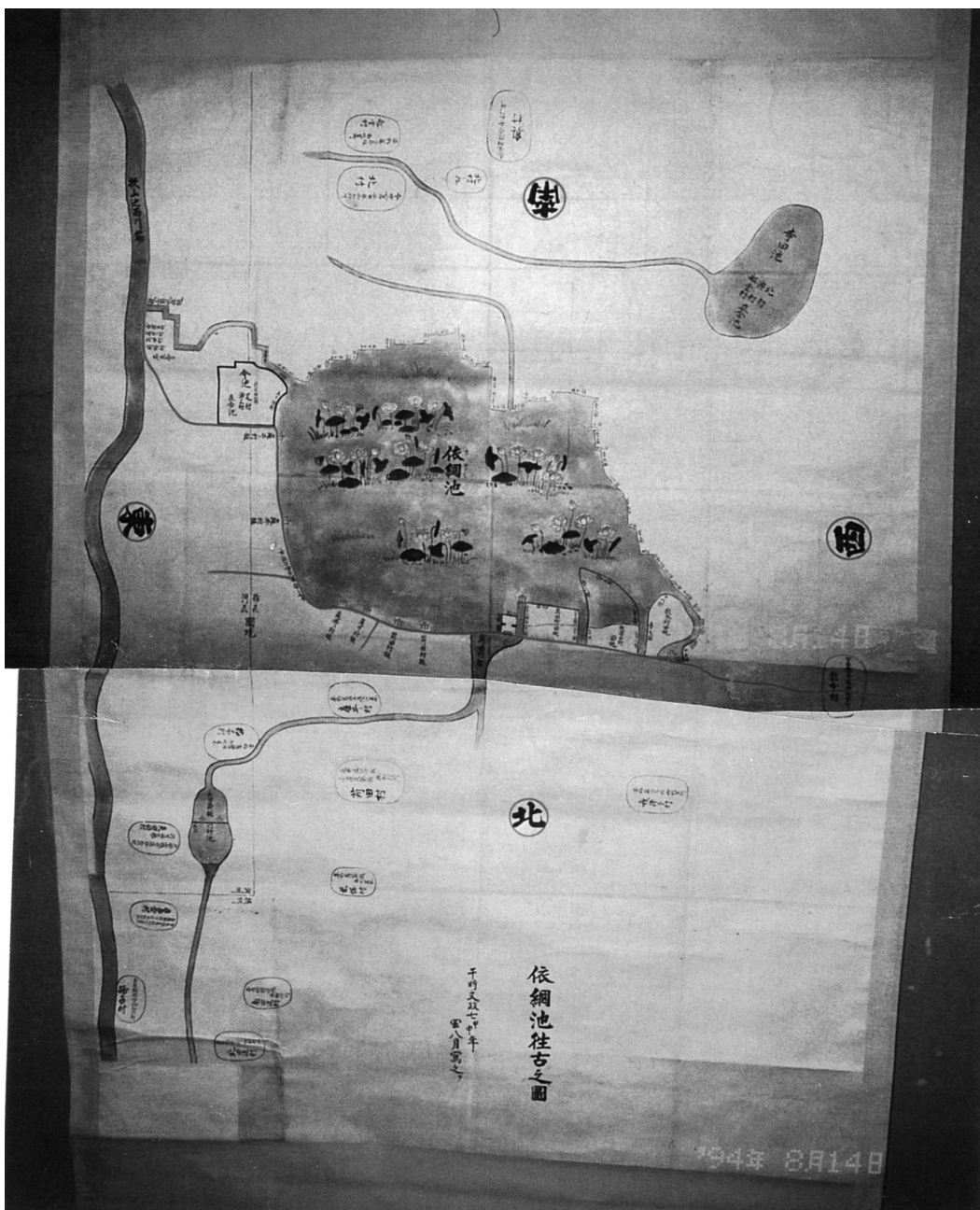


写真2 依網池往古之図

寺田家所蔵絵図〔文政7（1824）年写し、描写の時代背景は1700年前後期〕。

内となっている¹⁰⁾。さらに居村内の西には、御除地として伝馬屋敷がみえる。我孫子村は、堺から平野・八尾、堺から四天王寺へ至る街道が西の村境を通っており、伝馬役負担者の居住屋敷が設置され、地子免除の対象になっていたことが知れる¹¹⁾。

「我孫子村絵図」の余白に文祿3年（1594）に検地奉行：木下与右衛門によって太閤検地を受けた検分状況の概要が記されている。石高は751石2斗2升で内19石5斗3升8合が永荒、残731石6斗8升2合が毛付で、石盛は上田1反ニ付1石5斗代、中田は1石3斗代、下田は1石1斗代、上畑は1石2斗代、中畑は1石代、下畑は8斗代、下々畑は6斗代、外8石5斗2升1合は荒開とあり、下畑6斗代、下々畑は5斗代となっている。領内は東西6町、南北8町余、地形は西北高く、南東下り、東西下り、中辺南北高と記し、現行の地形とも共通する我孫子台地の状況が窺える。

こういった記載とともに「我孫子村絵図」には、我孫子村周辺村落の知行主名が示されている。庭井村領には柳沢出羽守様御知行所とあり、柳沢吉保が従五位下出羽守に叙任されたのは貞享2（1685）年にあたる。元祿元（1688）年に側用人として昇進し1万石を加増され、この時に和泉、摂津で知行地を得て¹²⁾、元祿7（1694）年の武蔵国川越入封時にもそのまま引き継がれている村落が多い。山ノ内村領（第3図カ）と寺岡村領（第3図キ）に太田摂津守殿御知行所とあり、延宝6（1678）年～貞享元（1684）年まで大坂城代に任ぜられた太田資次領で¹³⁾、庭井村領記載の知行主の支配時期と、比定年代に若干の食い違いがみられる。これは、城代就任者の一時的転属が頻繁におこなわれたことから、「我孫子村絵図」の作成側で、旧領主名を記載するなど錯綜していたのではなかろうか。

こういったことから「我孫子村絵図」は、1690～95年前後に描かれたものと考えられる。元祿郷

帳は元祿9（1696）年に調整するように命じられている¹⁴⁾ことから、「我孫子村絵図」は、この時に郷帳とともに差し出された付図の写しであったものとも推察され、我孫子村は古検のまま高付されていたことが読みとれる。

(2) 依網池池中の描写

「我孫子村絵図」には、依網池の全体が描かれている。大和川付け替えによって分断される前の依網池の全体を描いた絵図として、「依羅池古図」、「依網池往古之図」に続く三枚目となる。「依羅池古図」は、池岸線の屈曲に応じ間尺地が細かく記入され、その描写精度は極めて高い¹⁵⁾。「依網池往古之図」は、文政7（1824）年写しとあり、池岸線の屈曲に応じた間尺地の記入、及び全体の形態は「依羅池古図」と共通していることから、これをもとに依網池周辺域を含めて書写したものとみられる¹⁶⁾。

「我孫子村絵図」に描かれた依網池は、「依羅池古図」、「依網池往古之図」に描写された形とは若干異なり、池岸線の屈曲度も概略化され丸味を帯びる。「依羅池古図」と同様に池中に蓮が、さらに全体を覆うように菰類の繁茂している様子が描かれる。「依網池往古之図」の記載と同様に、狭山池からの取水井路（第1図B）が描かれ、その権利を伺わせる導水村として荊田、庭井、前堀、我孫子村の4ヶ村を記載している（第1図A）。

「我孫子村絵図」に描かれた依網池で最も特徴的なことは、池中に2本の井路（第1図I・II）が引かれ、これが合流して我孫子村の小池（第1図E）に集水され、同村へ導水されている様子をあげねばならない〔第3章(2)(3)〕。「依羅池古図」、「依網池往古之図」にも小池の輪郭は示されているものの、依網池中の2本の井路は描かれていない。

依網池をあらわした三枚の絵図の作成年代は、

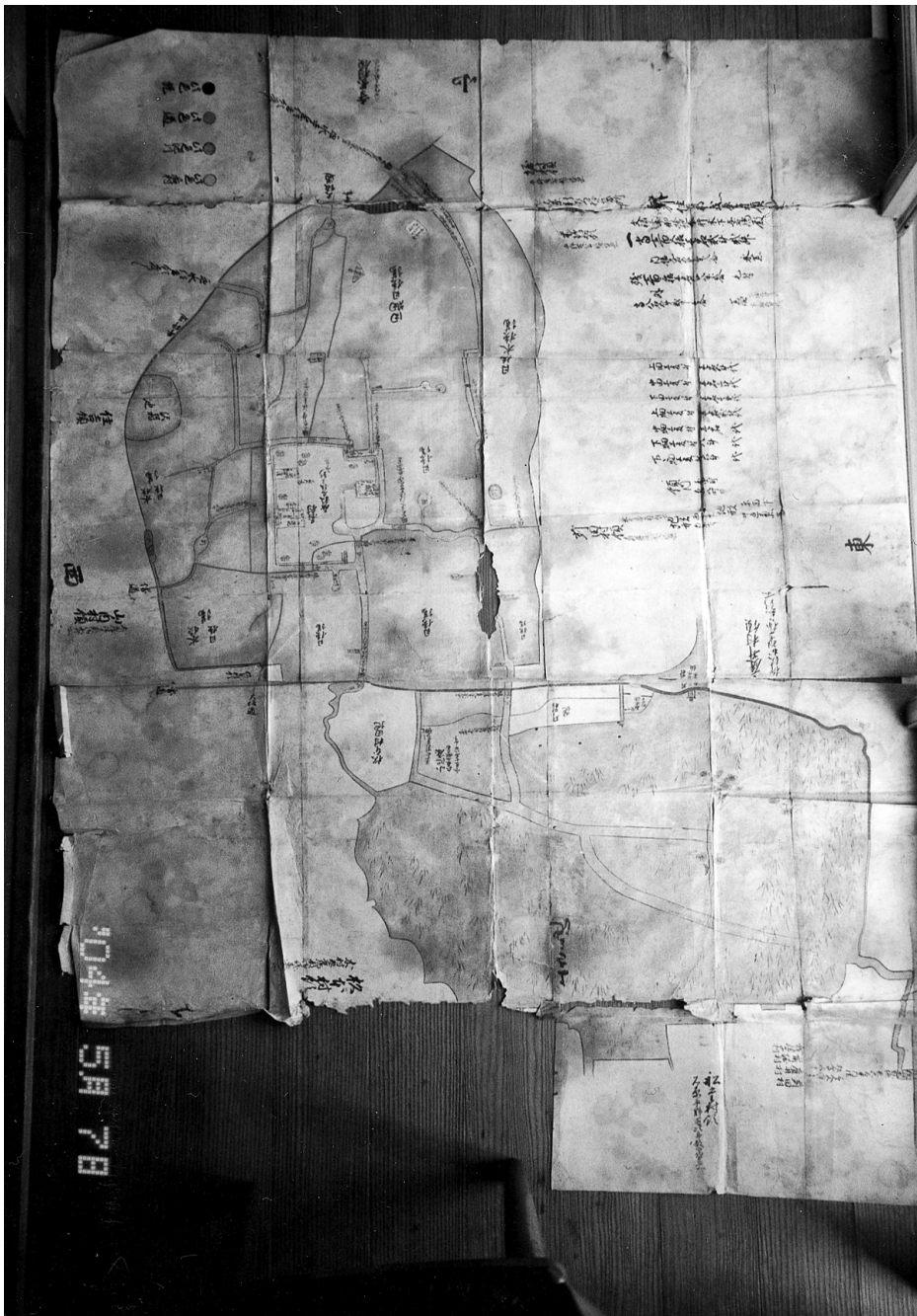
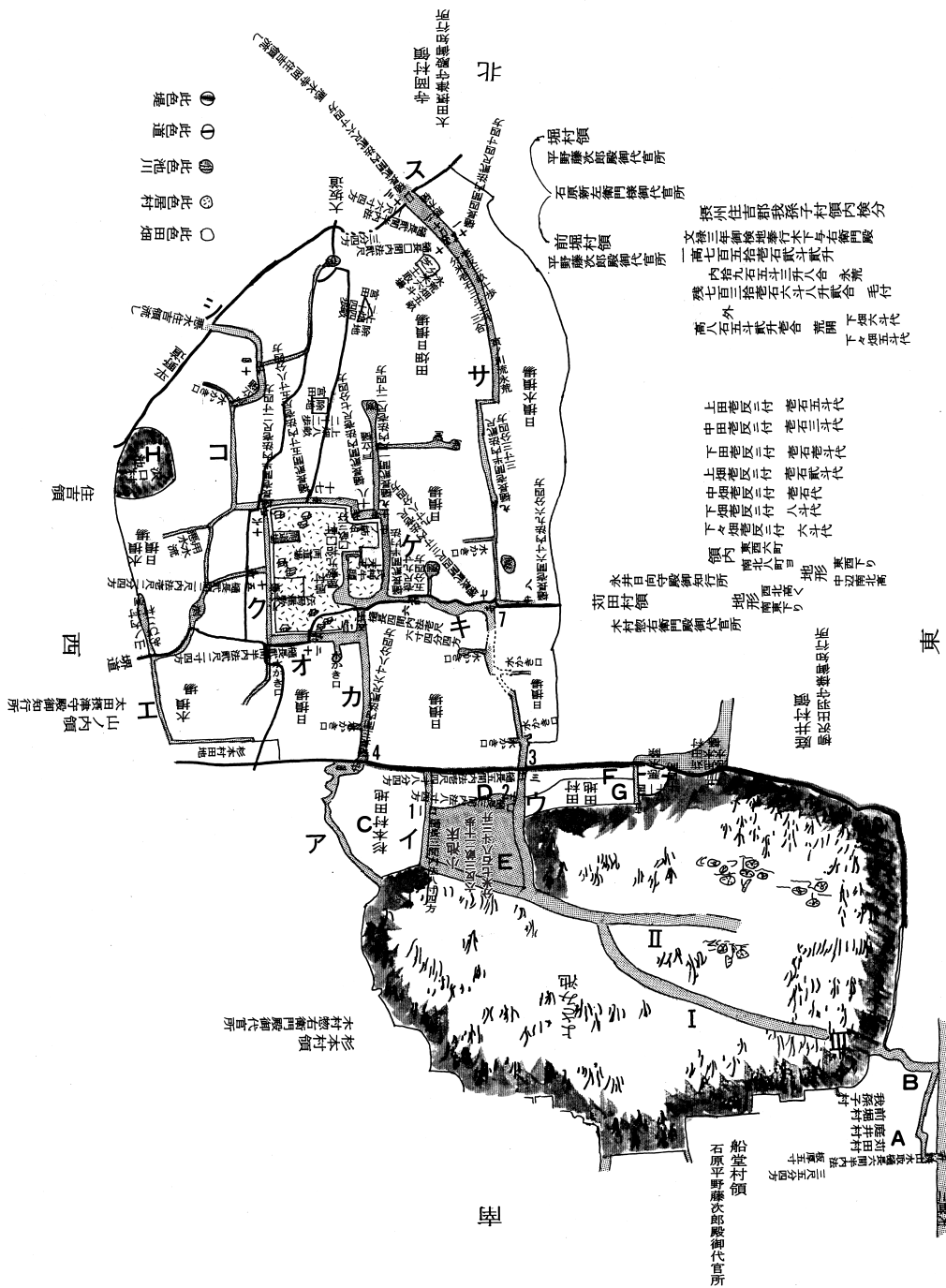


写真3 我孫子村絵図
森村氏所蔵絵図〔作成年不詳・1690～95年前後期〕



第 1 図 我孫子村絵図

資料：森村氏所藏絵図 [作成年不詳・1690～95年前後期]。

注) 各記号については、本文を参照。

「依羅池古図」が最も古く、測量精度からみて1600年前後から1690年の間、「我孫子村絵図」が1695年前後、「依網池往古之図」は描かれた周辺村の知行領主名からとらえ、その時代背景は1700年前後とみなされる¹⁷⁾。

3. 「我孫子村絵図」にみる水利事情

(1) 水かき口と日損水損場

「我孫子村絵図」の我孫子村域内に9ヶ所の水かき口と、8ヶ所に及んで日損場、もしくは日損水損場と記される(第1図)。

水かき口は主要井路より分岐したところどころに示され、導水する井路よりも田地が地高で、何らかの方法で水を掻き入れねば用水を引水できず、その土地が広範に及んでいたことがわかる。それと同様に日損水損場が随所にみられることから、用水の不足していた土地が、我孫子村のほぼ全域にわたって展開し、「我孫子村絵図」に西北高く、中辺南北高と記されていた事情とも共通する。

「後：我孫子村絵図」で、田畑日損場の記載は二箇所のみであった(第2図)。「後：我孫子村絵図」は、大和川が付け替えられて分断された依網池の状況を描いていることから、大和川付け替えにより用水が著しく不足して、その現状を訴えた絵図であったのではないかと推考していた¹⁸⁾。しかし、大和川付け替え以前の絵図である「我孫子村絵図」での日損水損場の記載は8ヶ所にものほることから、我孫子村の水不足はすでに深刻な状態におかれていたことがわかる。確かに大和川付け替えにともなう依網池の用水供給機能の衰退によって、その後水利改編を余儀なくされているものの〔第4章〕、我孫子村の水不足はそれ以前より慢性的な状況下におかれていた。

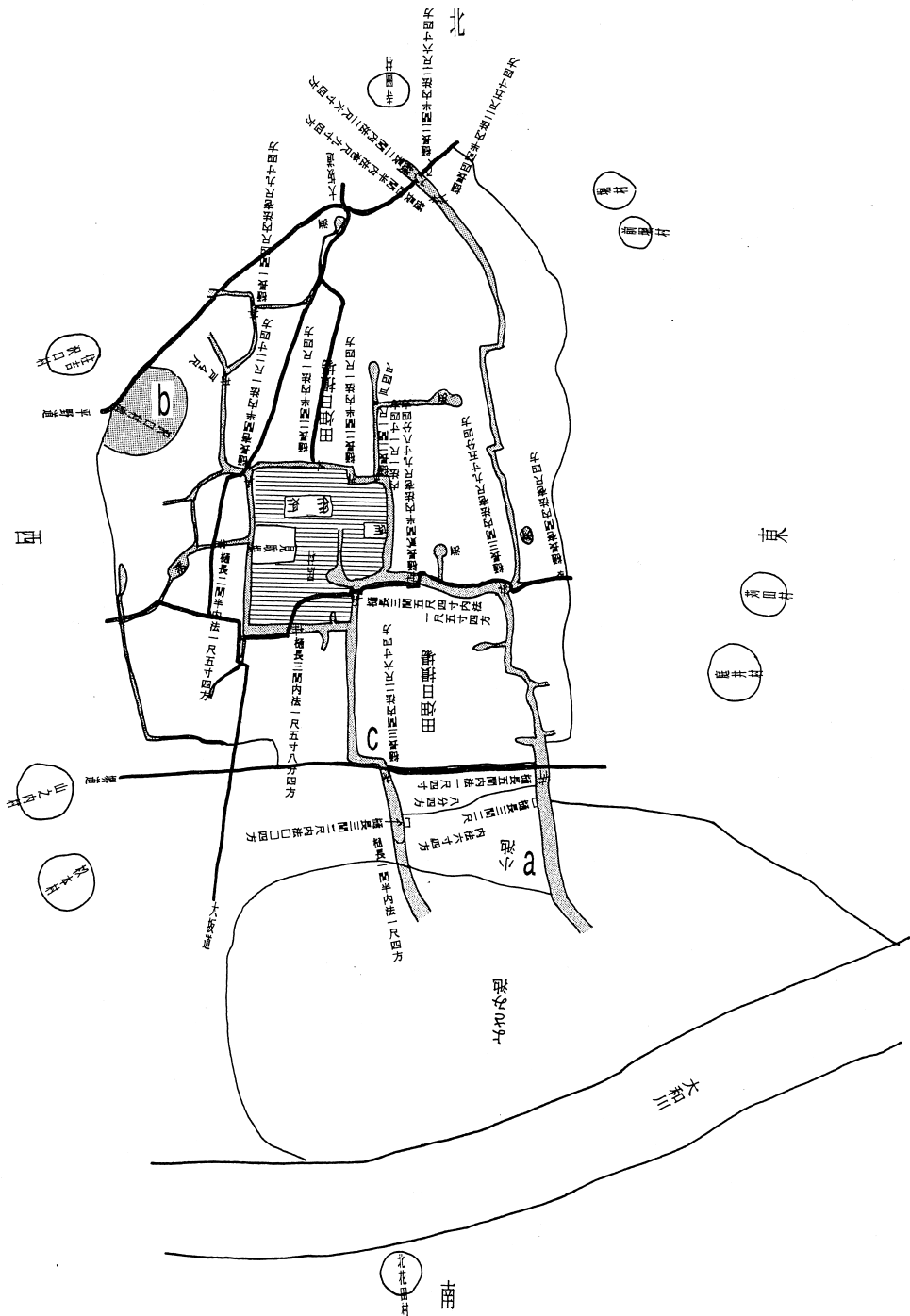
(2) 我孫子村小池の開削と導水経路

「依羅池古図」、「依網池往古之図」にも、池中に我孫子村の小池の輪郭が示されていた¹⁹⁾。こういった様子から、前稿で、我孫子村は依網池の全体の水位が低下した時に、この依網池中を堤防で囲った水利施設(小池)の残水によって、用水を確保していたものと推測していたのである。さらに「後：我孫子村絵図」で小池がより明瞭に描かれていることから(第2図a)、大和川付け替え後、依網池の水利機能を補う必然性から小池を再整備し、この時に我孫子村の水利システムが大きく再編されたとみていた²⁰⁾。

ところが、大和川付け替え以前の「我孫子村絵図」に整備された井路網が描かれ、小池の位置に、小池床6反3畝20歩、分米7石3斗3升と記され、高付されていたことが判明したのである(第1図E)。依網池は築造当初より池床が浅く、永年の土砂堆積によって常時露呈した土地が目立つようになり、そのところを開田していた様子が窺える〔第3章(4)〕。我孫子村では第1図Dの土地に続いて、文祿3(1594)年の検地までに小池床のところがすでに開田され、それをその後、池として新たに機能させた経緯が読みとれる〔第3章(3)〕。

我孫子村での小池を中心とした水利システムは、依網池が分断される宝永元(1704)年の大和川付け替え以降のことではなく、それ以前に開田されていた小池床のところを用水池として機能させ、依網池中に描かれた二本の井路を集水路として小池を支え、この時点で我孫子村の依網池用水をめぐる特異な水利特性が図られていたのである。

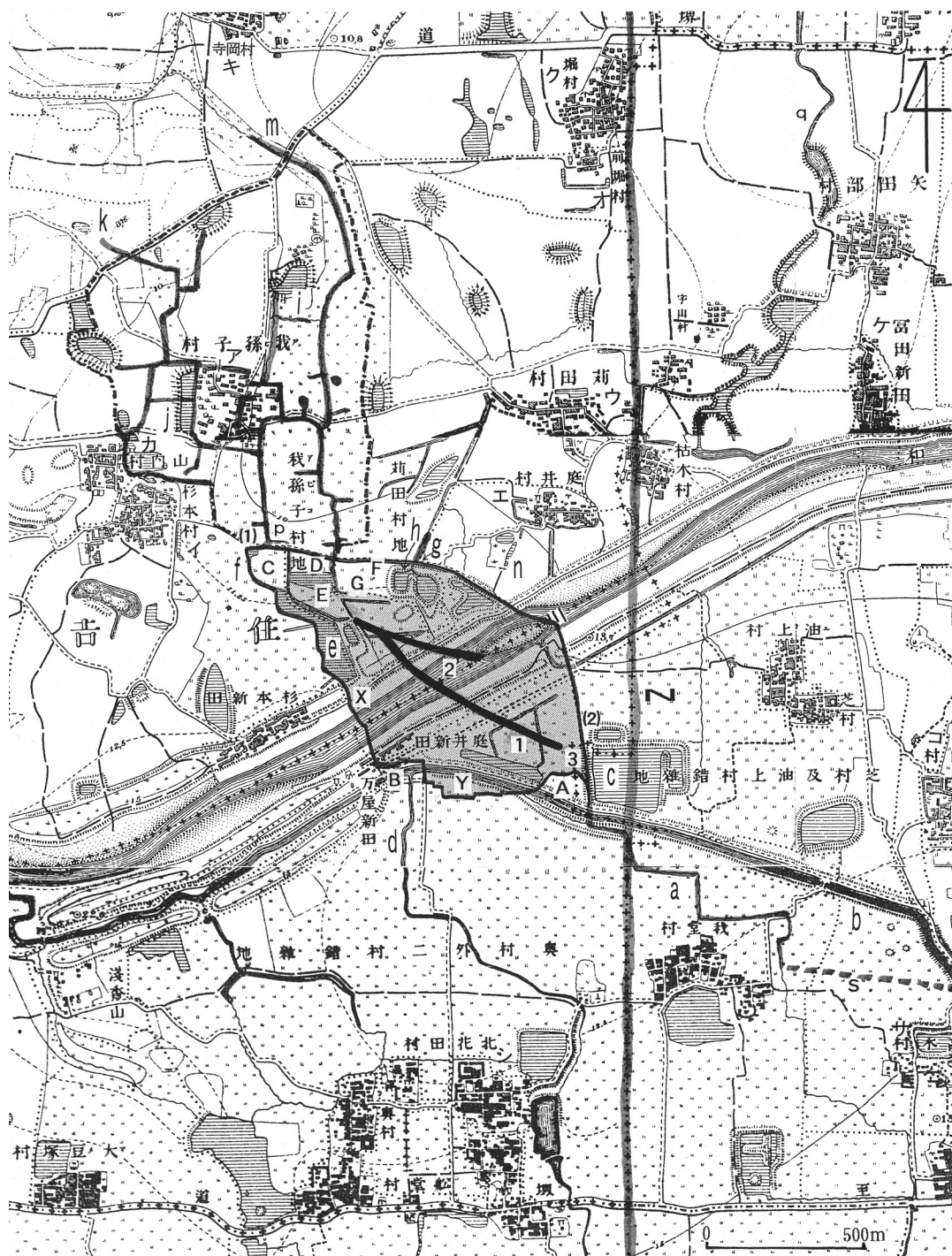
我孫子村では、依網池から三つの井路を経て導水している(第1図ア・イ・ウ)。第1図アの井路は、かなり早くより開田されていたと考えられる杉本村田地(第1図C)を西へ大きく取り囲み、この周辺での池床が極めて地高であるため、水流



第2図 後：我孫子村絵図

資料：寺田家所蔵絵図〔作成年不詳・1720年前後期〕。

注) 各記号については、本文を参照。



第3図 我孫子村絵図明治期比定図

資料：陸地測量部 1：20000複製図[天王寺村図：明治19（1886）、金田村図：明治20（1887）]をもとに作成。

注）各記号については、本文を参照。

を確保することが困難になっていたものとみられる。思うように導水できなかった第1図アの井路に替え、小池の掘削とともに第1図イの井路を敷設した様子が窺える。「我孫子村絵図」では、イから四番の樋（第1図4）へ至る部分の井路は描かれていないが、大和川付け替え後の「後：我孫子村絵図」や比定図として用いた明治19（1886）年仮製図では、その状況が明瞭に示され（第2図c、第3図p）、第1図イの井路からアの井路の北東端にある四番の樋へ導水していたことがわかる。依網池北西端の第1図アの井路は、「後：我孫子村絵図」（第2図）に描かれていないことから、小池が築造されるとともにその役割を大きく減退させ、満水時のみ杉本村と共同で我孫子村南西端の井路（第1図エ）の方向へ回すことができたのではないだろうか。

小池の築造に付随して第1図イの井路が新設され、それは依網池中の用水を導水するだけではなく、小池の一番の樋（第1図1）より流下した用水を四番の樋（第1図4）に導いて、我孫子村居村の東側の井路（第1図カーケ）に配水された。さらに居村の南で分水させ、西側の井路（第1図カーオーケーコ）より北西の悪水住吉領流しへ落とされる（第1図シ）。第1図イの井路はアの井路に替わって、我孫子村居村を大きく取り巻いて分水するシステムがとられていたものと考えられる。しかし、その水懸かりは我孫子台地の尾根部にあたることから、全体的に地高で極度の水不足に陥り、水懸かりの半分程度しか用水を供給することができなかったものと推察される²¹⁾。

一方、第1図ウの井路は、依網池中の用水を直接導水した他、小池の二番の樋（第1図2）より三番の樋（第1図3）、七番の樋（第1図7）で調節しサの井路に導水した。我孫子村の領域は東辺に低いことから、村域の東端部がこの井路の水懸かりとなり、さらにイの井路の余水がカからキ

の井路を経て流下したことがとらえられる。ウの井路の水懸かりは、第1図で日損水損場と記されているものの、我孫子村のなかでは比較的水持ちがよかったものとみられる。ウーサの井路を通水した余水は、住吉大社（第4図S）南辺に至る細井川へ流下した（第1図ス、第3図m、第4図H）。

(3) 池中集水井路の設置と慶長期狭山池大改修事業

溜池が灌漑機能を増幅させるためには、その前提となる集水の如何に大きく左右される。それだけに依網池中に小池を築造する前提として、集水の確保が不可欠であった。「我孫子村絵図」の描写で最も特徴的なことは、小池の開削とともに依網池内を東西に二本の井路が描かれていることに集約される。一本は天道川（西除川）²²⁾からの狭山池用水の取水（第1図A・B）と結びつく井路（第1図I、第3図1）で、もう一本は池の中央北寄りの、位置する地形型から考えて依網池の最深部とみられるところより延びている井路（第1図II、第3図2）が明瞭に描かれている。この二本が合流して依網池中の小池に集水されている様子がとらえられる。依網池中に小池を設置することによって、その機能を増幅させるため集水が最大の課題であったことがわかる。

狭山池は、慶長13(1608)年に片桐且元による大改修にともない、水下地域の水利再編がおこなわれている²³⁾。狭山池用水は北堤に設置された西樋（西川筋）と中樋（東川筋）を通じて水下地域へ配水される。依網池は西川筋にあたり、慶長17(1612)年に番水²⁴⁾が敷かれ、杉本、我孫子、庭井、荳田、前堀村と堀村（第3図ク）が狭山池用水を受水している。我孫子村では、承応2(1653)年、延宝4(1676)年、元禄9(1696)年の番水時にも受水しており、狭山池との関係は大和川付け替えまで続いていた²⁵⁾。

慶長期の狭山池大改修時に、水下地域一帯ではこれに呼応するかの如く新たに溜池を築造している²⁶⁾。我孫子村もこの大改修事業に合わせて、文祿3(1594)年の検地で高付されていた依網池中の開田されていたところに小池を築造し、狭山池用水の取水に備えたものと考えられる。依網池中に描かれた第1図Ⅰの井路は、明らかに狭山水取樋(第1図A)から延びる取水井路(第1図B)を意識して設置されている。狭山池取水井路より依網池に流入した部分が途切れているが(第1図Ⅲ、第3図3)、これは蒔田、庭井、前堀村の狭山池用水の取水に対して妨害にならないように配慮したものである。狭山池番水の受水時はもちろんのこと、西除川より用水を小池に集水する時には、この途切れた部分に俵積み土手を急造して取水しなければならなかった。依網池中の第1図Ⅱの井路は、池中の最深部の用水を集水するためのものであったとみられる。

依網池中の土砂堆積とともに、村域が全般的に地高である我孫子村では蒔田、庭井村と比べ、依網池からの用水取得に支障をきたすようになっていた。早魃時に送水される狭山池番水を取水しても、旧来の依網池の形態のままでは思うように我孫子村に導水できなかったのであろう。その機能を回復させるため、慶長期の狭山池大改修事業に合わせて小池が築造されたものとみなされる。その結果、依網池中に池があり、そして井路がある特異な様相を示すようになった。池中に設置された井路は俵積みで、半ば固定化されていたとみられるが、「依羅池古図」、「依網池往古之図」に池中の井路が描かれていないことから、依網池満水時に沈水した不安定なものであった。それだけに維持管理に相当の労務を費やし、蒔田、庭井村との利害調整に努めたことが想起できる。

(4) 池中埋積の経緯

依網池に流入する主な河川は、光竜寺川(第3図d)と東南端の狭山池用水を取水した井路(第3図a)である。細流であり狭山池と比べると、その土砂の流入量は相当少ない。しかし、依網池は築造当初より池床は浅く、「我孫子村絵図」、「依羅池古図」に、池面のほとんどを覆うように蓮や菰類の水生物群落が描かれていることから、池中埋積の様子が推察された。依網池の復原とともに作成した第3図の様相から、池床の土砂堆積の状況を推測することは、用水池として機能してきた依網池の変貌の経過の一端を探ることにつながる。

河内・和泉の地域では用水を確保するために、水利施設の保全をめぐる村落水利共同体としてのさまざまな水利作業を課し、幾多の管理上の慣行が醸成されてきた。なかでもたえず池床に土砂が堆積することから、用水池としての機能回復のために池浚の労務に努める必要があった²⁷⁾。

狭山池周辺の一帯では、土砂の除去は坪堀りといって、農家の所有反別ごとに坪単位で割り当てられ(坪割り)、採取した土砂を田地の肥沃維持のため散布する慣習がみられた²⁸⁾。依網池の場合、こういった池浚慣行が実施されても、池面積が広大であることから全池に及んで浚えることは困難で、時代の経過とともに池床に土砂堆積が進行し、満水になっても冠水しない土地がみられるようになっていった。

それはまず西南池岸の光竜寺川河口付近(第3図B)と、南東池岸の狭山池取水井路口付近(第3図A)にみられた。いわゆる池岸河口の三角州形成による土砂堆積である。光竜寺川河口は「依羅池古図」に川幅貳間と記され小流であったが、流入する唯一の自然河川であり、かなり早い時期より埋積していったとみられる。狭山池取水井路口のところは、前稿で引用した享保9(1724)年の

「庭井・北花田・船堂・奥村争論噺絵図」（寺田家所蔵、前稿に掲載・本稿では略）²⁹⁾に、北花田村川越八ヶ所田地として描かれている。こういったことから、この井路の河口部は古くより北花田村（第3図シ）領で、相当早くから西除川より取水し、埋積していたことが知れる。

さらに依網池の埋積は、北堤北西池床で顕著にみられる。依網池の位置する地形は、北西寄りに地高であることから杉本村と共用したとみられる我孫子村への導水井路（第3図f）が、杉本村田地（第3図C）を大きく取り囲んでいる。それだけにこの部分の池床は極端に浅く、かなり早い時期に杉本村田地として開田されていた。この杉本村田地は、状況によっては築堤当初より冠水しなかった古田地であったともみなされる。

北堤北西池床部の土砂堆積は、我孫子村田地として開田された第3図D、そして北堤中央寄りの荻田村田地として開田された北側の第3図Fの池床に及ぶ。さらにそれらと隣接する池中への土砂堆積が進むなかで、荻田村田地（第3図G）、我孫子村小池床（第3図E）のところの開田に連なっていたのである。

他に南池岸線（第3図Y）のところも、上流の小井路からの土砂流入で相当浅くなっていた³⁰⁾。同様に、地高である西側池岸線（第3図X）のところも池床がたえず露呈し、杉本村の依網池からの灌漑は難渋を極めていた状況がとらえられる³¹⁾。

築造されてから千数百年の間、依網池の土砂堆積は漸次広範囲に及び、近世初期の依網池の池岸線は必ずしも常に復原した状況にあったとは限らず、貯水状況が不安定で大きく様相を変化させていたものとみられる。

4. 「我孫子村絵図」にみる水利空間の変貌

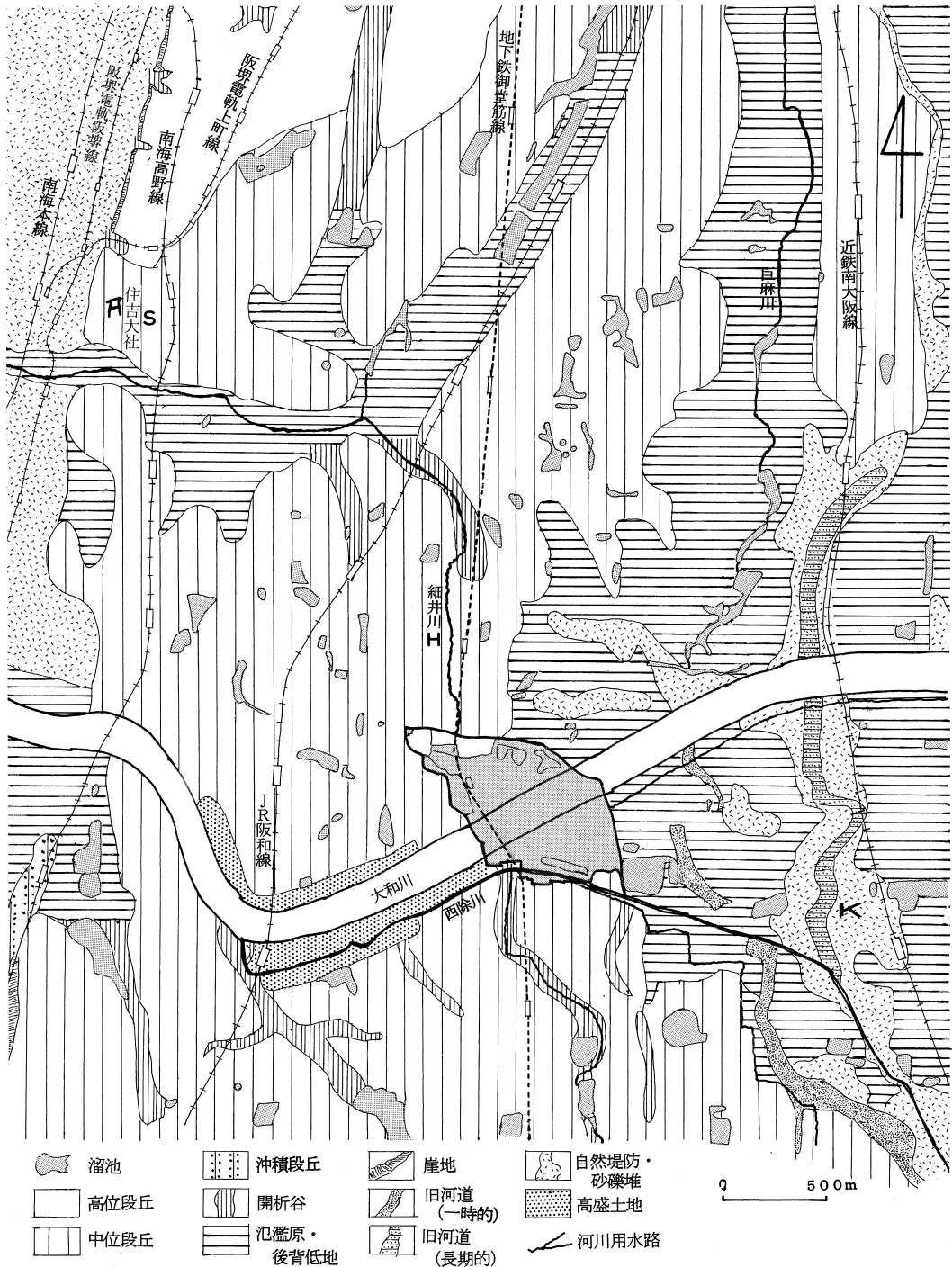
依網池は池中に池があり、そして井路がある特異な溜池であった。それは我孫子村が依網池用水

を利水する過程のなかで形づくられてきたものであり、我孫子村の水利空間のみにとどまらず、「我孫子村絵図」より16・17・18世紀の依網池周辺の水利事情が蘇る。「依羅池古図」、「依網池往古之図」では依網池の形態描写に力点がおかれ、灌漑域での水利事情は推測の範囲でしか読みとることができなかった。それが「我孫子村絵図」では、周辺に波及した水利背景が鮮明にとらえられるのである。

池中の井路敷設の状況、及び我孫子村の水利事情から、前稿で考察した以上に池床の埋積は著しく、用水の利水に相当支障をきたしていたことが明らかになった。それだけに16・17世紀の依網池用水をめぐる、比較的豊潤に利水できた荻田、庭井村と、地高で時代を追うごとに難渋を極めた我孫子村では、利水のうえでの構造的な違いが認められる。それが我孫子村の小池の築造、そして池中の二本の井路の敷設にあらわれ、前堀村や杉本村の利水を含め、その利害調整が依網池の新たな課題になっていったことが想定できる。

我孫子村小池床のところは高付されていたことから、依網池床の埋積→開田→小池開削といった経過のなかで、16・17・18世紀の我孫子村での依網池用水の利水の経緯が推測される。池中の埋積が進行していたことから、かなり早い時期より池床の開田化が図られ、我孫子村では16世紀末までに小池床のところを開発したものとみられる。その後、慶長期の狭山池大改修事業のなかで、依網池利水の抜本的な見直しが急務となり、小池が開削され、それを中心とした水利システムがとられるようになった（第1図）。

大和川付け替え以前の依網池の用水供給機能はかなり低下していたものの、池面積が広大で後背としての集水の役割は依然として大きく、我孫子村では依網池に頼った水利再編を模索する必要に迫られていたのではないかと考えられる。こういったなかで、



第4図 依網池周辺地形分類図

資料：国土地理院 1：25000大阪東南部土地条件図〔昭和58（1983）年印刷〕をもとに作成。

注）各記号については、本文を参照

狭山池取水井路に連なった池中の井路からの集水の重要性とともに、慶長期に遡って狭山池大改修事業にともなう依網池周辺を含めた狭山池水下地域の水利再編の一端が、「我孫子村絵図」より推考できるのである。

宝永元(1704)年の大和川付け替えによって依網池は分断されたものの、我孫子村では依網池を背景に小池を中心とした水利システムが依然として継続されている(第2図)。しかし、依網池の小池への集水機能が衰えるなかで、我孫子村では享保8(1723)年に依網池の水利権を放棄して、池床を村高に応じて開田していくことに踏み切り、これがきっかけとなり享保15(1730)年の荳田、庭井、前堀、杉本村での依網池床分割につながっていく³²⁾。これ以降、我孫子村では、小池を親池として、村域内に新たに築造された村池をうつし池として、大和川付け替え後の水利改編が実施されていくのである³³⁾。

こういった「我孫子村絵図」に描かれた我孫子村を中心とした水利事情は、明治19(1886)年仮製図をもとに作成した比定図によって、その背景が浮き彫りにされる(第3図)。我孫子村域内の西辺の井路(第3図f-k方向周辺)、西除川に近い狭山池取水井路(第3図s)の部分は推測の描写になるものの、我孫子村のそれぞれの井路ごとの三つの灌漑域に区分される第1次水利空間、我孫子村が集水する小池を含んだ第2次水利空間、小池を補完する集水域としての依網池を含んだ第3次水利空間、荳田、庭井、前堀、杉本村に及んだ依網池全灌漑域の第4次水利空間、西除川からの取水に広げた第5次水利空間、周辺地域との利害のなかで広域の狭山池用水を取り込んだ第6次水利空間、そして、これらの水利空間とは別途の巨麻川(駒川：第3図q)に余水が流出する範囲での水利空間、を想定することができるのである。こういった水利空間が互いに絡みあって、変貌し

ていったこの地域の水利事情の経緯が、「我孫子村絵図」に秘められているのである。

5. 古代依網池への展望(まとめに代えて)

近世初期の依網池の復原研究を基にして、今後の依網池研究にはふたつの視点が定められる。ひとつは大和川付け替え以後の依網池の動向と近代に至るまでの変遷過程³⁴⁾、あとひとつは中世から古代に遡る依網池の開削の歴史である。

依網池の開削については、記紀に度々記載されていることもあって、その時期をめぐって幾つかの見解がみられる³⁵⁾。その多くは『日本書紀』仁徳四十三年九月条の「依網屯倉阿弭古異鳥捕」の記事³⁶⁾から、5世紀初期頃に依網屯倉が池溝の開削によって営まれていたとしており、この考え方が定説になっているといえる³⁷⁾。しかし、いずれも記紀記載の概要をとらえたのみで、具体的な根拠をもって論証されてはいない³⁸⁾。

筆者は、上流にある狭山池が近年の治水ダム化事業による埋蔵文化財調査によって、620年前後に築造されたと確定³⁹⁾されていることと関連させ、開析谷を堰き止めたダム形式の狭山池の形態と比べ、依網池は立地する地形型(第4図)から低い堤体が連続しており、比較的容易に築堤できたこと、周辺に弥生前期から古墳時代にかけての集落遺跡の分布が多くみられること、依網池の灌漑域が氾濫原から中位段丘面の漸移地帯に及んでおり(第4図)、河内・和泉地方の高燥な段丘面の開発がはじまる5世紀中期前後、遅くとも6世紀初期頃までには築造されたものとみている⁴⁰⁾。

さらに依網池の築造について、灌漑域の地形型の状況から二段階乃至三段階築堤説をとり、西に(第3図(1))、南に(第3図(2))堤を延長して機能を増強していったと考えている⁴¹⁾。依網池の築堤延長・増強は、何百年も隔てて後世におこなわれたものではなく、依網池の灌漑域が、我孫子村

の中位段丘面に拡大した時期、それが依網池の水利機能の増強の最終段階であり、これが近世初期の復原した依網池の形態と結びつくのではないかとみている。

『日本書紀』で、推古天皇十五（六〇七）年冬条に依網池の築造、推古天皇二十一（六一三）年十一月条に難波より京に至る大道の設置、皇極天皇元（六四二）年五月条に河内国の依網屯倉の前で射雉を観る、の記事がみられる⁴²⁾。大道については依網池東の隣接するところを南北に貫いた古道跡が発掘されており、これが難波大道（第3図N）と推定されていることから⁴³⁾、7世紀初期頃までには、近世初期の復原した形態に連なる依網池が形づくられたとみておきたい。

依網池関連の中世での史資料が乏しく、土地経営、用水支配のシステムなど基本的に異なる近世初期の態様から、古代に遡ってとらえる疑点は残るものの、やはり日本最初の池溝開削である古代依網池の姿態をとらえていくことが依網池研究の重要な課題であると考ええる。

それは現存する大依羅神社（第3図n）の歴史的経緯や位置関係、狭山池をはじめ『住吉大社神代記』に記載される針魚大溝⁴⁴⁾など、近辺での古代に遡る歴史をもつ池溝開削との比較、大仙陵池など古墳周濠との立地形態⁴⁵⁾、及び周辺に分布する諸溜池との利水や立地からの検討⁴⁶⁾、ふれてきた記紀記載の難波大道との生産・流通の側面からの考察、条里制など古代の土地制度との関連、周辺地域に分布する弥生～古墳時代の遺跡の分析、依網池を復原した現況景観との比定から残存する幾つかの依網池痕跡の探査と発掘調査への期待⁴⁷⁾、池床面のボーリング調査による地質データの収集・分析など、さまざまな側面からのアプローチが求められる。

個人研究のなかで、その方法によっては調査・収集・分析に限界・困難が付き纏うものの、前稿

での近世初期の依網池の復原研究、本稿での「我孫子村絵図」から得られた依網池の水利特性の分析をもとに、古代に遡る依網池の地表空間を具体的に実証する時期にきているように思える。大胆にも仮説をたて、現在の景観から過去の景観を再構成する歴史地理学の手法によって古代依網池の開削について検証していくことを今後の課題としたい。

【付記】

本稿は2004年度人文地理学会大会において発表したものを骨子としてまとめたものである。

作成にあたって、「我孫子村絵図」の閲覧、並びに論著への了承をいただいた森村健一氏（堺市埋蔵文化財センター主査）、「我孫子村絵図」の分析に際し貴重なアドバイスをいただいた中山潔氏（大阪府立三国丘高等学校教諭）に、お礼を申しあげ、ここに厚く感謝の意を表する。

注)

- 1) 川内眷三「近世初期の依網池の復原とその集水・灌漑について」四天王寺国際仏教大学紀要第35号、2003、19-53頁。
- 2) 記紀における依網池・狭山池の池溝開削の記述として、以下の記事をあげることができる（読み下し文掲載）。

①日本書紀 崇神天皇六十二年七月条

丙辰、詔して曰く、農は天下の大本なり。民の恃みて以て生くる所なり。今、河内の狭山の埴田水少し。是を以て、其の国の百姓、農の事を怠る。其れ多に池溝を開きて、民業を寛かにせよと。

②日本書紀 崇神天皇六十二年十月条

是の月、依網池を造る。

③古事記 崇神天皇条

また是の御世に、依網池を作り、また輕の酒折池を作りき。

④古事記 垂仁天皇条

凡そこの天皇（垂仁）の御子等、十六王なり。男

王十三、女王三。(中略) 印色入日子命は、血沼池を作り、また、狭山池を作り、また日下の高津池を作りたまひき。

⑤古事記 仁徳天皇条

此の天皇(仁徳)の御世に、(中略)。また秦人を役ちて、茨田堤また茨田三宅を作り、また丸邇池・依網池を作り、また難波の堀江を掘りて海に通はし、また小橋江を掘り、また墨江の津を定めたまひき。

⑥日本書紀 推古天皇十五年(六〇七)冬条

是の歳の冬、倭国に、高市池・藤原池・肩岡池・菅原池を作る。山背国に、大溝を栗隈に掘る。且つ河内国に戸苅池・依網池を作る。また国毎に屯倉を置く。

依網屯倉、及び依網池周辺に関連するものとして、以下の記事がある。

⑦日本書紀 仁徳天皇十四年条

是の歳、大道を京(難波高津宮)の中に作る。南の門より直に指して、丹比邑に至る。

⑧日本書紀 仁徳天皇四十三年九月条

庚子の朔、依網屯倉の阿弭古、異しき鳥を捕りて、天皇に献じて曰く、「臣、毎に網を張りて鳥を捕れど、未だ曾て是の鳥の類を得ず。故に奇として献る」と。天皇、酒君を召して、鳥を示して曰く、「是れ何れの鳥ぞや」と。酒君対へて言ふ、「此の鳥の類、多く百済に在り。馴し得て、能く人に従ふ。亦、捷く飛びて、諸鳥を掠る。百済の俗、此の鳥を号して俱知と曰ふ」と。是れ今時の鷹なり。乃ち酒君に授けて養い馴さしむ。未だ幾時もあらずして、馴すを得たり。酒君則ち韋の縞を以て其の足に著け、子鈴を以て其の尾に著け、腕の上に居ゑて、天皇に献ず。是の日、百舌鳥野に幸して遊獵す。時に雌雉多く起つ。乃ち鷹を放ちて捕らしむ。忽ち数十の雉を獲たり。

⑨日本書紀 仁徳天皇四十三年九月条

是の月、甫めて鷹甘部を定む。故に時の人、其の鷹を養ふ処を号して、鷹甘邑と曰く。

⑩日本書紀 推古天皇二十一(六一三)年十一月条

冬十一月、掖上池・畝傍池・和珥池を作る。又難波より京に至るまで、大道を置く。

⑪日本書紀 皇極天皇元(六四二)年五月条

己未、河内国の依網屯倉の前に於て、翹岐等を召し、射獵を觀せしむ。

(『古事記』倉野憲司校注、『日本書紀』国史大系第1巻上・下による)。

上記①の池溝開削の記事は、河内狭山と記述されており、狭山池の関連を類推することは可能であるが、直接、同池の築造についてふれたものではない。また、池の呼称として『古事記』孝元天皇条に、同天皇の御陵として「劔池の中の岡の上にあり」とでてくるのが初出であるが、池溝開削との関連についてはふれられていない。したがって、池溝開削の具象名の初見は依網池といえる。

3) 4) 5)

前掲1) 29-32頁。

大正15(1926)年11月～昭和6(1931)年におこなわれた昭和大改修事業での狭山池の規模は、満水面積：約39万4千 m^2 、堤体面積：約7万9千 m^2 で、貯水量は約178万6千 m^3 であった。集水域が広大で、貯水量ではるかに凌ぐ狭山池と比べ、依網池の用水供給機能は劣るが、池面積では同程度といえる。

6) 「我孫子村絵図」は、大和川・今池遺跡の発掘調査に携わった堺市埋蔵文化財センター：森村健一氏が所蔵する。堺市美原町南余部在住の天見昌弘氏より依網池研究の一助になればということで譲渡を受け、同氏の尊父天見幾太郎氏が古書店で購入したという経緯がある。

7) 「後：我孫子村絵図」は、村全域と大和川付け替えによって分断された依網池の北の部分が描かれる。村域の構成は「我孫子村絵図」と酷似し、これを原図として「後：我孫子村絵図」が描かれたものと思われる。大和川付け替え後に北部に残置された依網池の全域が描かれ、第3図にみえる我孫子村の村池が描写されていないことから、大和川付け替え後の水利改編がおこなわれる直前、1710～1720年前後期の作成とみられる。

8) 我孫子村だけではなく、この周辺の村落の多くが環濠集落としての形態をもつ。第3図の明治19(1886)年仮製図においても、村によって環濠部分の残影が

みられる。

- 9) 10) 井上正雄『大阪府全志巻之三』清文堂出版、1922、132頁。
- 11) 「後：我孫子村絵図」では見取場となっており、「我孫子村絵図」の伝馬屋敷の記載とは異なる。主要街道の宿駅でないため、領内巡検の際の検見場としての役割をも果たしたものとみられる。
- 12) 『日本歴史人物辞典』朝日新聞社、1994、1726頁。
- 13) 『日本歴史地名体系第28巻・大阪府の地名』平凡社、1986、727頁。
- 14) 『国史大辞典第5巻』吉川弘文館、1984、449・450頁。
- 15) 「依羅池古図」は、大正8（1919）年に他の水利絵図とともに、前堀村の田代家が大依羅神社へ寄贈したものである。その経緯を記した添書きには、伝・文明年間（1469～1487）の作図とある。北堤と東堤には長間尺値、南・西池岸線は屈曲に応じて間尺値が記入されている。その測量値の精度は高く、細微にわたって描こうとした配慮が窺える。こういったことから、早くとも太閤検地以降、状況によっては宝永元（1704）年の大和川付け替えによって分断される可能性があることから、この期に依羅池の周囲を測量し、形態を示しておく必要性から描かれたものとも推察される。本稿では、慶長13（1608）年に狭山池が大改修され、この地域一帯の水利再編がなされていること、「依羅池古図」が依羅池の全体をとらえた原図とみなされることから、1600～1690年の間の作図とした（前掲1）27-31頁）。
- 16) 17) 「依羅池往古之図」は、文政7（1824）年写とある。それは「依羅池古図」をもとに、周辺地域に及んでその時に書写したものか、すでに原図として存在した別の「依羅池往古之図」をもとに写したものか、その判断がつかぬ。原図がみつからないこと、記されている各地行領主・代官の領した時期が完全に重ならないことから、「依羅池古図」をもとに1690年代半ば以降1700年前後期を想定して写したものと考えられる（前掲1）50頁）。
- 18) 前掲1）43頁。
- 19) 「依羅池古図」では、小池の西南の堤の部分が見落しているものの、その輪郭の部分が見落されている。

「依羅池往古之図」では、三角形の堤が明瞭に描かれ、長さ25間、58間、85間の間尺値が示される。両図とも小池という名称の記載は見られない。

- 20) 前掲1）43頁。
- 21) 我孫子台地は我孫子村居村の北西側が最も高く、この南北が尾根線となる。標高は高いところで13m程度であるが、第1図四番の樋の位置（第1図4）で11m余であり、依羅池水懸りのなかでは最も導水が困難なところであった。
- 22) 大和川付け替え後、狭山池用水を導水する西除川の流路は西に変更された（第3図b）。それ以前は北流し、第4図によって旧河道跡（第4図K）を確認することができる。高木村（現松原市、第3図サ）に至り布忍川、池内村（現松原市、第3図コ）を経て富田新田（現大阪市東住吉区、第3図ケ）に出て天道川、喜連村（現大阪市平野区）の西を流れて息長川と呼ばれ、さらに北の桑津村（現大阪市東住吉区）東で依羅池の余水を流下させる巨麻川（第3図q）と合流する（前掲9）10）3頁）。
- 23) 慶長期の狭山池大改修事業は、水下農民が時の領主である豊臣秀頼公への陳訴により、片桐且元が林又右衛門、小島吉右衛門、玉井助兵衛の三人を普請奉行とし、5人の下奉行の監督の下でおこなわれている。狭山池の西にあたる岩室村（現大阪狭山市）をはじめ、上流の村々の34町歩にあたる土地が土探場、池床になったことがとらえられており、かつてなかった大改修であったことが知れる（『狭山池改修誌』大阪府、1931、207-213頁）。これによって狭山池用水の分水高は5万4千5百7拾6石3斗9升、村数80ヶ村に及んだ（『狭山町史本文編』狭山町、1968、487・492頁）。
- 24) 狭山池用水は、春彼岸に樋門を閉じ秋彼岸に開放する。開放中の寒水を水下地域の村池に貯える慣習を客水と呼ぶ。樋門を閉じている期間中は、村池の用水を使い尽くした時に狭山池用水を配水する。各村一定の時間と順番を決め、関係者立会のうえ時間を測定して村池に分水し、これを番水と称しその時間割を水割賦と呼んでいる。慶長13（1608）年の大改修後の慶長17（1612）年に番水が敷かれ、その状況を記した水割賦帳が残されている。これによって

- 狭山池とその利水をめぐる水下地域の変遷状況を知ることができる。
- 25) 前掲1) 37-39頁。
- 26) 慶長5 (1600) 年に、三宅村 (現松原市) では深淵池と大海池、更池村 (現松原市) では新池が築造されている (『松原年代記』松原市史編さん室, 1975, 2・3頁)。他に、慶長17 (1612) 年に狭山池の余水の貯水を目的に、西除川下流1.5km左岸の位置に轟池の造池がみられる (寛文9 (1669) 年廃池)。轟池は大仙陵池をはじめ、石津村、万代 (百舌鳥) 村、長曾根村 (いずれも現堺市) の1万6千8百石に導水された (『堺研究』所収「老圃歴史(1)」堺市立図書館, 1975, 20・21頁)。こういった事例のように、慶長期の狭山池大改修事業にあわせ、主要溜池の築造がみられる。
- 27) 大和川付け替え後、残置された杉本村の依網池 (第3図e) の管理をめぐって、享保9 (1724) 年、寛政2 (1790) 年、文化8 (1811) 年、文政7 (1824) 年、天保7 (1836) 年に池浚工事を実施した記録がみられる (① 山崎隆三編著『依羅郷土史』大阪市立依網小学校創立85周年記念事業委員会, 1962, 65頁)。
- 28) 『金田風土記』堺市金岡町自治連合会・金岡町文化協会, 1987, 10頁。他、狭山池水下地域での聞き取りによる。
- 29) 大和川付け替え後、依網池南池床部は主に庭井村の新田地として開田されるが、その時に西除川の井堰の設置をめぐって取り交わした付図が「庭井・北花田・船堂・奥村争論図」である。大和川付け替え後の南池床部の各村の境域及び権利関係を示した唯一の絵図といえる (前掲1) 29頁)。
- 30) 大和川付け替え直後期とみられる二つの「大和川池中貫通見取図」 (前稿に掲載) が現存する。「寺田家所蔵：大和川池中貫通見取図」では、大和川付け替えによって同時に流路が変更された西除川筋の南側に及んで依網池の南池岸が描かれている。「大依羅神社所蔵：大和川池中貫通見取図」では、西除川筋のところで南池岸はとめられている。南池岸の部分は池床がたえず露呈した状況であったために違った描き方になったものと考えられる (前掲1) 21・29頁)。
- 31) 杉本村では、依網池の西の部分に村池として残置し (第3図e)、我孫子村と共用したとみられる第3図fの井路を通じて杉本村田地に灌漑したものとみられる。杉本村の村域は西側に地高であり、我孫子村と同様に依網池からの導水は難渋したものと推察される (前掲1) 44・45頁)。
- 32) 我孫子村は享保8 (1723) 年に依網池の権利を放棄し、池床を村高に応じて自村分2町1反余りを新田開発にしている。これに続いて、苅田、庭井、前堀、杉本村では享保15 (1730) 年に村高に応じて池床を分割し、各村の持池について普請することも、新田開発にすることも自由という文書をだしている (前掲27) ①59-61頁)。
- 33) 大和川付け替え以前の「我孫子村絵図」、付け替え後の「後：我孫子村絵図」とも沢口村池 (第1図H、第2図b) がみられるにも関わらず、村域内の溜池が描かれていない。第3図では蓮田池 (第3図i)、また池 (第3図j) の他、村域内に幾つかの溜池が掘削されている様子から、1720年以降に我孫子村では依網池に見切りをつけ、集水機能が衰退した小池の補助として、村域内にうつし池を築造し、水利改編がおこなわれたものとみなされる。新しく掘削された村池の分布は、村域中辺から西辺に偏っており、水利事情が困難であった第1図Iの井路懸かりと重なっていることがわかる。
- 34) 本稿脱稿後に新稿として、寺田家所蔵の絵図をもとに、大和川付け替え以降の依網池の変容をまとめた論文がだされた。付記しておきたい。
市川秀之「大和川付け替えと依網池の変容」大阪府立狭山池博物館研究報告第2号, 2005, 13-23頁。
- 35) 37) 38)
依網池の開削について、直木孝次郎氏は『日本書紀』推古天皇十五年冬条の記事に依拠して、7世紀初期に築造されたととらえている (『松原市史第1巻』松原市, 1985, 101-103頁)。多くの見解は、山崎隆三氏が『日本書紀』仁徳天皇四十三年九月条の依網屯倉阿弭古異鳥捕の記事から4～5世紀に (前掲27) ①9-12頁)、亀田隆之氏も依網屯倉の設置に合わせて用水地が相前後して5世紀初頭頃に (『日本古代

用水史の研究』吉川弘文館、1973、4頁）、同様に上田宏寛氏が依網屯倉の設置、有力豪族阿弭古の居住地との関係から5世紀前半の仁徳期に造られた可能性が高いとしている（『新修大阪市史第1巻』大阪市、1988、385頁）。このように5世紀初期の開削とする見方が定説になっている。しかし、いずれも記紀記載記事の背景を想定したものであり、概要の範疇にとどまっているといえる。

36) 前掲2) ⑧

39) ①市川秀之「最古の溜池・大阪狭山池の築造について」歴史と地理、1995、67頁。

②光谷拓実「狭山池出土木樋の年輪年代『狭山池一埋蔵文化財編一』所収、大阪府狭山池調査事務所、1998、470-471頁。

40) 河内・和泉の高燥な段丘面の開発がはじまる5世紀中期前後に、依網池が築造されたとする考え方は日下雅義氏によって展開される（『歴史時代の地形環境』古今書院、1980、303頁）。筆者は、依網池が氾濫原から中位段丘にかけて立地する地形型の状況を鑑み（第4図）、周辺地域の土地条件から検証することを、今後の課題のひとつとして定めている。

41) 前掲1) 26頁。

42) 前掲2) ⑥⑩⑪。

43) 依網池の東接した位置に、1978年～1980年にかけて両側溝に挟まれた幅18m、総延長距離170mの古道が検出され、これが難波宮の中軸線上に至ることから難波大道跡であると推定されている（第3図N）。東側溝より検出された須恵器・杯身が600年～670年に比定され、それまでに難波大道が設定されていたとみられている（森村健一『大和川・今池遺跡Ⅲ発掘調査報告書』大和川・今池遺跡調査会、1981、90-100頁）。

大道の記事は、『日本書紀』仁徳天皇十四年条にもみられ（前掲2）⑦）、依網屯倉経営地の生産・流通の側面から、依網池と難波大道を関連づけた考察が待たれる。

44) 『住吉大社神代記』に記された、以下の針魚大溝の記述について、南河内の段丘の開発を想起させる。我が田我が山に、潔浄水を錦織・石川・針魚川より引漉はせて、榊の黒木を以て能く吾に斎祀れ。覬覦

けむとする謀あらむ時には、斯くの如きに斎祀れ」と詔宣したまひき。亦、山預の石川錦織許呂志が仕へ奉る山名は所所に在り。（中略）仍りて御田に引漉がむと欲し、針魚をして溝谷を掘り作らしめむと思召す。大石小石を針魚、掘返して水を流し出でしむ。亦、天野水あり、同じく掘り流す。水の流れ合ふ地を川合と云ふ。此れ山堺の地なり、大神誓約ひて詔宣はく、我が溝の水を以て引漉がしめ、我が田に潤けて其の稲実を獲得ること石川の河の沙瀝石の如く（田中卓『住吉大社神代記の研究』所収「訓解・住吉大社神代記」国書刊行会、1985、172・176頁より）。

日下氏は、針魚大溝について土地割と小字名によって東除川岸の羽曳野市恵我之莊付近より、北西方向に掘削し天野水（西除川）を合わせ、依網池を経て住吉堀割に流下したと推論している（前掲40）283-293頁）。住吉堀割は本稿でとらえた我孫子村域を貫通する細井川（第1図ス、第3図m、第4図H）にあたる。針魚大溝について『住吉大社神代記』記載の社領範囲や依網池との関連のなかで、さらなる検討の余地が残されている。

45) ①川内眷三「古墳周濠の土地条件と集水機能について―大仙陵池への狭山池用水の導水をめぐって―」四天王寺国際仏教大学紀要第37号、2004、35-56頁。

②川内眷三「大仙陵池と狭山池にみる水環境再生施策の構図と課題―歴史地理学の視点から―」水資源・環境研究第17号、2005、35-52頁。

46) 川内眷三「近・現代における狭山池水地域下の導水経路の状況と溜池環境の変貌」『狭山池論考編』所収、大阪府狭山池調査事務所、1999、279-335頁。

47) 近世初期での依網池の復原から、大依羅神社をはじめ、今池（第3図c）と共用したとみなされる東堤の一部が残置され、さらに北堤跡の位置に荊田村樋（第3図g）、余水吐（第3図h）が埋没されている可能性が高い。余水吐や樋の構造から池の歴史や規模を考察することができ、なかでも今池の堤体断面の土質調査によって、築堤工法がとらえられる。こういった見地に立つての文化財調査は、狭山池を例外として、ほとんど実施されていないのが現状である。